

Share を行うこととなった。WHO の discussion は具体的な動きになるまでには時間を要すると思われるが、IT による多くの人間を繋ぐネットワーク化は、合理的である。

日本でも Expert group member を増やし、参加を呼びかけたいと考える。下記は本日入った新しいディスカッションのテーマである。参考にして頂きたい。

### All Together Better Health 5 - International Interprofessional Conference, Sydney, Australia

・ Title: All Together Better Health 5 - International Interprofessional Conference, Sydney, Australia

・ Start: 06 April 2010, 0:00 [+0100 UTC]

・ End: 09 April 2010, 0:00 [+0100 UTC]

・ Description: The All Together Better Health conferences are the leading international interprofessional health and social care symposia. The 5th ATBH conference is being held Sydney, Australia.

The All Together Better Health conferences are supported by InterEd, the international association for Interprofessional Education and Collaborative Practice - a not for profit association.

We see things differently in the southern hemisphere. Therefore, we are encouraging diversity and innovation in the 2010 conference program. There will be diversity in the number, background, culture and experiences of our presenters and delegates. Health and social care professionals, practitioners, patients, consumers, administrators, policy makers and especially students are warmly invited to come and share their time and experiences with us.

We will encourage discussion and debate, interactivity and international sharing and, in addition, we invite everyone to participate in the development of the Sydney Interprofessional Declaration to advance interprofessional education, learning and practice over the next two years.

The Sydney Interprofessional Declaration will aim to ensure that the challenging and exciting dialogue from this important conference will continue into the future.

・ Sponsor: Australasian Interprofessional Practice and Education Network (AIPPEN) and InterEd

・ Contact: ATBH5 Secretariat

・ Contact email: atbh5@conferenceaction.com.au

Web address: <http://ATBH5.com.au> click [here](#) to read online.

今回は 8 日間、患者に対する医療事故防止のテーマでの discussion があつた。約 1000 名、約 100 カ国からの参加者があつた。

### 3. 将来の発展にむけて

全ての業界においてグローバリゼーションは不可欠であり、医療業界では更に重要性を増す。

過去における日臨技の国際事業は交流と視察、ならびに JICA、JIMTEF への協力がメインであった。国際事業に対する理解は深まり、国際社会における日本の地位は高まったと考える。

今後は世界からの情報の発信を更に強化し、国内における認定制度や事業を考える際には国際的視野からの企画も組み入れることを推奨したい。

IFBLS は教育を重視している。基礎となる部分を教育の現場では core curriculum、実務現場では core competence として、世界の検査技師が共有で持つべきとしている部分を整備し、発信することを考えている。

また、IFBLS の事業を再考し、社会的だけでなく各国の臨床検査技師に対するグローバリゼーションの強化を図る必要がある。以下の具体的な提案をしていきたいと考える。

#### 1. 経済的政策について

- ① IT を駆使した会議の合理化
- ② 事業としての国際学術セミナーの企画

#### 2. 教育システムの確立

- ① IT を駆使した教育システムの確立
- ② Expert group の活性化による、各部門ごとの国際活動の強化。(最先端の学術情報の交換・論文の投稿)

### 3. 社会(外部)へのアピール

① 世界レベルでの広報活動:

② Expert group による WHO 等への更なる積極的な参加と情報発信。

などが必要であるとする。

これらの事業を進めるには、Expert group の大幅な増員が必要である。日本においても活動組織を作り、査読・翻訳・資料提供・海外へ情報発信の作業ができる海外渉外部員と、e-learning のテキスト作成・新しい検査技術の情報提供・学会シンポジストなどを推薦する各専門分野のエキスパートを集めた海外学術部員の 2 部門が必要となると考える。海外への連絡はメールを中心に行うこととなる。

#### ☆3の1に関して

日本国内においては、チーム医療推進企画協議会が立ち上がり、今年度 1 月 30 日に鶴見大学にて、医療関連団体にマスコミも加わり、第 1 回シンポジウムが開催された。

そこでは各専門職を尊重し、さらに専門性を高めて患者のための医療を支えることや、コ・メディカルではなく医療スタッフと称すること、など、各医療関連団体の地位確立に新しい動きがでている。

さらに、厚生労働省より平成 22 年 3 月 19 日付で『チーム医療の推進について(チーム医療の推進に関する検討会 報告書)』が公表されており、「臨床検査技師については、近年の医療技術の進歩や患者の高齢化に伴い、各種検査に関係する業務量が増加する中、当該業務を広く実施することができる専門家として医療現場において果たし得る役割が大きくなっている。」と明記されるに至っている。

世界では遺伝疾患患者への心理的 follow を行う専門家、数年前から日本でも話題となった Pathology assistant など、新たな専門分野が誕生している。

WHO の 2 月の discussion では予防医学の専門家や市民への衛生指導者は、どこの職種がするべきか、教育段階レベルから考える必要があるとの意見が出されている。

Interprofessional という立場で、お互いの職種を尊重しながらの共同企画という基本的姿勢は国内外ともにあるが、今後も業務の専門性はしっかりと確保しなければならない。

また、我々臨床検査技師が業務拡大を考える際には、国際的な動きをいち早くキャッチし、国内に還元する必要があるだろう。また、世界規模での専門分野のレベルアップが社会的認知度には密接な関係があるとする。世界を繋ぐのは日臨技である。

#### ☆卒後教育の一環としての英語教育に関して(実践の場の提供)

国際活動を行う際に問題となるのが語学である。

現在若手の臨床検査技師の中には語学堪能な者や短期留学経験者が見受けられる。

しかし、語学力だけでは組織の代表として活動することはできない。組織の管理者としての管理運営・組織経営・人材育成者としての経験も必要であろう。

近年 Communication tool として英語活用のできる人材は確実に育っており、未来は明るいと確信する。

現在、学術面では、英語を流暢に話すことはできないが、最先端の研究を行っている技師は多い。論文には Native check を依頼する必要はあるが、学術面での英語講演は準備が可能である。質疑応答は完璧な英語でなくても構わないと考える。多くの方が国際の場での講演を体験することを期待する。

組織活動においては、会議の参加には代表者の発言は重要である。誤解を避けるためには、かなりの英語力がある人物でない限りは通訳を同伴するべきであり、恥と思う必要はない。社交の場でのチャレンジは必須である。

ヨーロッパのいくつかの大学では、母国語でなく英語で授業を行っているところがある。言語が違う国が隣接していることが関係しているとするが、日本の臨床検査技師を育てる大学においても、語学も重視した教育制度を考えるべきであろう。